



信州の野焼き

現在の野焼き

野焼きは、春先新芽が出る前に、前年の枯れ草と樹木の実生を焼き、草地の森林化を防ぐものです（写真1）。現在は、農家が農地管理の一環として行うものと、地域住民が共同で観光地の景観保全や屋根用茅の採取等のために行うものがあります。



写真1 木曾町開田高原での野焼き



図1 共同で野焼きが行われている地域。
() は実施時期、黒色は黒ボク土の分布を示す。

共同作業での野焼きの方法

共同で行う野焼きの方法はどこもよく似ています。まず、対象とする草地の上端を風下からある一定の幅で焼き切り、次に左右を上から下へと焼き、最後に下端の両端から火を入れ、最終的に火が真ん中に来るようにします（図2）。焼き切る幅は、風の強さや傾斜、草の長さによって異なり、経験知によって判断されます。メンバーは毎年ほぼ同じで、お互いに声を掛け合いながら行います。このように、野焼きには延焼を防ぐための様々な配慮がみられます。

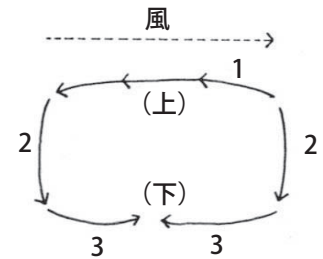


図2 一般的な野焼きの方法。
数字は火入れの順序。

野焼きの長い歴史

最近、県土の16%を占める黒ボク土について、草の微細な炭が多量に含まれること、一部が縄文時代に形成されていることが明らかになり、野焼きの起源が縄文時代に遡る可能性が指摘されています。縄文時代は狩猟、古代は牧の設置、中世は信濃武士団の活躍などとの関連が考えられています。

江戸時代には、多くの農家が堆肥生産や運搬用に馬を飼っていたので大量の秣が必要でした。特に冬の干草は重要で、各地で良い干草を生産するために野焼きが行われていました。馬産地であった木曾地域には、明治以降国や県が草地の森林化をすすめるため火入れ禁止策をとったのに対し、自ら火入れ地の植生調査を行い（写真2）、火入れを認めさせた歴史もあります。

しかし戦後、農業が機械化すると馬は減少し、野焼きも次第に衰退しました。草地は植林地や森林等となり、草地景観は観光資源として見直されるようになりました。

生き物に与える影響

火を入れると地表面は高温になりますが、地中1cmは40℃以下です。そのため春先、地中で暮らしているカヤネズミは火の影響を受けません。植物へは i) 光環境が良くなる、ii) 灰はミネラルとなり土壤に還元される、iii) 黒化した植物が地表を温め発芽を促す等の効果が指摘されています。草本類では火に強いススキ等イネ科草本が増加し、木本類は減少しますが樹皮のコルク質が厚いカシワ等残りはやすいといわれています。

現在、野焼きが続けられている草地の多くは、キキョウ（図3）やオミナエシ等の稀少種の生育地となっています。近年、下草火災の増加や観光客の苦情など、野焼きを取り巻く環境は厳しくなっています。信州の野焼きの歴史とそれによって守られてきた生きものがあることも知っていただけたらと思います。（浦山佳恵）

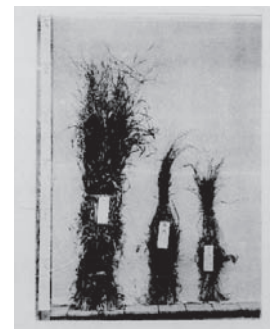


写真2 火入地と不火入地の採草量の比較。当時の植生調査の結果をまとめた『原野火入の研究』（伊東,1918）から抜粋。



図3 長野県で絶滅危惧種に指定されているキキョウ